

17 明治以降の東山口地区における教育と文化

筆 者 岡本 春一

教育村としての伝統と誇り 東山口村と小学校(黎明期より)

明治5年新政府は西洋の近代文化に遅れまいと、学校制度「学制」を布きます。これに依って浜松県は明治6年県令第125号に依って旧掛川市内は五ヶ所に小学校を設ける事になりました。東山口は日坂学区となりましたが、通学に不便であるから山鼻の廃寺平安寺を借りて、千羽分校を設けて通学する事になります。実際に授業が始まって見ると低学年は通学に不便であるから、明治11年には八坂学校(影森の廃寺龍松寺)、小鷹学校(現在地伊達方の廃寺源心庵)と千羽学校の3ヶ所で授業を行ないます。学校経費の問題から財政の比較的豊かな東山口は村民の共通理解を得て、明治19年には中央の小鷹学校に校舎を増築し、3地域は合併して岳陽学校と改名します。

明治22年町村制の改正に依って前3地域はまとまって東山口村が誕生します。校名も東山口村立東山口尋常小学校と名称も変わります。その翌年明治天皇は「教育勅語」を下賜して、国民道德の根源、国民教育の基本理念を明示した勅語が發布されます。御真影と共に天皇制教育の主軸となり、校長は国の祝祭日に朗読が義務付けられます。

明治27年日清戦争が始まり、近代戦争は教育程度の低い事は(当時は無学の者も多かった)、戦争戦略や軍事訓練にも支障を来す事から、明治33年には小学校は4年間が義務教育となります。高等科2年の併設が奨励されると、合併に依って出来た財産区の資源もあって、余裕の有った東山口村は早速高等科を設置します。未設置の西山口村、日坂村、東山村、栗本村の裕福家庭の生徒も委託生として受け入れる事にします。明治40年教育令の改正に依って、小学校義務教育期間は更に6年間に延長されます。

この様に教育に力を入れた東山口村は、明治43年「学校基本財産蓄積条例」を作り5ヶ年計画を立て、当初計画は基本金1万円として(後増額)、寄付金と卒業祝金・結婚祝金等を之に充て、その利子を以って学校教育の振興を図って、村負担の教員給料等に充て優秀教員の誘致にも役立ちます。

農業教育の充実

明治44年には小学校高等科に農業科を課す事になります。東山口は農業教育の充実を図る為に「農業実習地」畑6畝・茶園3畝・果樹園2畝・観察園1畝を設け、作業服も作って卒業と同時に、農業後継者として役立つ為に農業実習も始めます。大正期に入ると実習地2反8畝余となり、昭和に入ると鶏舎・豚舎・兎の飼育も始まります。実践校として郡下にもその名を馳せました。

東山口の伝統一源三流の校訓

明治41年日本は日清戦争に中国を破り、日露戦争では大国ロシアに勝ったが、実質は戦争で資金も底を尽き財政的にも窮乏は深刻の一途にあった。日露戦争大勝に酔って国民は自

我を失いつつあった。この時明治天皇は「戊申詔書」を発し国民教化と人心の浮華を戒め、上下の一致と勤勉儉約を訴え国民の自重を促した。これを受けて学校教育の中にも、日常生活の中にも詔書の精神を生かすべき空気が漂っていた。

この事を受けて当時東山口小学校長であった山本芳太郎は、明治 44 年に一源三流の「東山口小学校校訓」を制定し、人物を養成する教育の本筋を抽出して、誠を求め三本の柱を立てた。これが誠①勤労の汗、②親切の涙、③勇気の血の三本に簡潔にまとめた。これを期に東山口小学校の伝統として、毎朝の朝礼の時級長の号令で唱和した。生徒は汗を流して働く事は人間最高の姿である。人をいたわり人情に厚く親しい事は素晴らしい。正しい事は恐れなく進み努力する人は立派であると。低学年では言葉の理解に苦しむが、担任の先生の解説で私もそういう人になりたいと、強い決心が養われて来た。

少年警備隊の設置

大正 12 年東山口小学校では他校では珍しい「少年警備隊」が設置された。(この年は関東大震災も発生した)。村の設置規定に基づいたもので、規定にも有る通り「少年警備隊ハ校長之ヲ監督指揮シ学校警備ノ任ニ当リ、他日本消防組員タルノ予備訓練ヲ行ウ」と云うもので、村の親消防組と同様で小型ではあるが、殆んど同様の機械器具が備え付けられていた。

今一つは村の重要な財産である学校や施設を、いち早く火災から守るという一面も有った。後日村消防組として即間に合う様に、高等科 2 年の選抜者はポンプ車、高等 1 年の選抜者は水槽車、選抜者意外と 6 年生は水槽に水を送る係りであった。秋の連合演習、正月の出初式には東山口村消防組と共に出動してポンプ操法や行進訓練も行った。地域の火災にも出動して名誉旗並びに馬簾が授与されている。放水訓練では親消防に負けじと的の提灯落としを競った。

青年学校と戦争

昭和 12 年 7 月「日華事変」が勃発した。翌年「国家総動員法」が公布されます。日本はいやおうなく戦争に突入して行きます。そして男子たる者は即戦力として戦場に出て、一人前の軍人として活躍出来る様に軍国主義が一段と高まる中で、昭和 14 年 4 月小学校を卒業した者は、何れの地に居ても「青年学校」が義務教育制(12～19 才)となり入学させられました。特に卒業したら即戦力として戦場の第一線に立てる様に軍事訓練を重視した。

東山口村青年学校も同時に開校します。一般教養は小学校の先生が農閑期に少し教えたが、主目的は軍事教練であった。担当するのは村の退役軍人で厳しい軍隊生活を経験した者が選ばれて指導員となった。生徒はカーキ色の青年学校服を着て、銃を持ち剣を付け敵を突き倒す厳しい戦闘訓練が中心であった。弱腰の生徒を見付けると指導員は「なんだ手前等それでも男か、米を喰う虫か。」と人間扱いで無く虫だと、軍隊同様の罵声を浴びせ掛けられてたじろいだ。

又併せて「体育省の検定」が行われた。それぞれの個人の体力がどの位置にあるかを測定するもので、走る(100 米)、持続力(2000 米)、跳ぶ(走り幅跳び)、投げる(模擬手榴弾)等を総合して上中下級に別け、個人の体力測定を行ない即戦力としての検定も行った。そして伊

達方のコウメンの池では実弾射撃訓練も行った。毎年度末には査閲官が各学校ごとに検閲が行われ、軍事訓練の到達度が評価された。校長並びに指導員と生徒は如何なる講評を頂くか、一喜一憂して日常訓練の成果に耳を傾けた。昭和 16 年東山口村立尋常高等小学校は東山口村立国民学校と改称され、いよいよ小学校も戦時体制に突入する事になった。

徴兵検査と出征

男子は 20 才になると如何なる地に勤めていても、徴兵検査は受けなければならない。体力学力検査を受け甲種、乙種、丙種に別け、甲種は必然的に入営する。乙種は戦火が激しくなると当然戦場に駆り出され兵役に服する事になります。昭和 16 年 12 月日本は遂に宣戦布告を出して、ハワイ真珠湾の奇襲攻撃を手始めとして太平洋戦争に突入します。

戦火の拡大に依って入営、応召、志願兵の出征者が出ると村は総出で小学校の校庭で壮行会を催し、村長を始め村民総出で見送ります。特に印象に残っているのは在郷軍人分会長の鈴木正季氏の送別の辞で、本人の名誉と功績人柄に至るまでよく調べ栄誉を称えた。残念ながら戦火に倒れた方は村葬が行われた時は、鈴木氏は国に尽くした功績を徹底的に調べ栄誉を讃頌した。

私も 18 才で海軍に志願した。海軍 24 航空隊司令部附となり、配下には天山艦上攻撃機(真珠湾攻撃に参加した九六式攻撃機より倍高速)と零戦部隊を抱え、攻撃・爆弾投下、魚雷発射、計器飛行、夜間訓練、基地の猛訓練を経て特攻訓練終了の打電と共に南方基地に出撃した。出撃と共に全国から新しい特攻隊員として選抜された隊員が入隊する。新特攻隊員は支給された新しい飛行服の

ジャケットに、「我借身命」を始めとする自己の決意書込み、再び力強く特攻訓練に入る。最後に見送ったのは昭和 19 年 12 月「沖縄決戦」で配下の各航空隊は九州の各基地に出撃した。爆音の中で司令は決別の辞として「我々はここ 3~4 ヶ月の内に必ず成果を見せる。我々の存在した事を後世に伝えてくれ」と死を覚悟の感涙の辞を述べた。20 年 4 月ごろまでには彼等は沖縄の空に散華した。当日私は郡山航空隊に転属し高等教育を受ける為に山中の教場で終戦を迎えた。

今次支那事变より太平洋戦争には東山口村からは、443 名の方が出征し 117 名の方が尊い命を国に捧げた。私の同級生も 3 名が戦死している。鈴木正季氏は戦時中は在郷軍人分会長と云う職責上、こうした軍事に携わった人は終戦後は公職追放された。そうした自責の念が厚かった鈴木氏は、早速国家の為に尊い命を捧げた戦死者の慰霊の為に、小学校の裏山に山口神社の建設を提案し、その先頭に立ってご努力された。

戦後の教育の混乱

昭和 20 年 悪夢の太平洋戦争は終わった。戦時中の校舎は兵隊の宿舎になった所も多く、運動場は甘藷畑となった。空襲警報の度に避難する、満足な教育は行われなかったと振り返る。終戦に依って学校教育はようやく息を吹き返したものの、新しい民主主義教育はどうするか、昨日まで軍国主義の教育を強要した教員が、今日からは民主主義の教育をどの様に教えるか、現場の教職員は一段ととまどった。物資不足で軍国主義的な箇所は黒塗りの教科書

となった。やがてザラ紙の薄い教科書に移行した。

さらに昭和 22 年学校教育法に依って六三制の義務教育が施行された。戦前は裕福な家庭しか進学出来なかった中学校が義務教育となり、あたらしい期待に胸をふくらませた。しかし肝心の教員の不足から教職に経験の無い中学校卒業者が充てられたために、教育の質の低下は免れなかった。東山口では小学校の小鷹寮の校舎を借りて期待の「東山口中学校」が発足し授業が始まりました。

長い村の歴史を辿って見ると、東山口が教育村として何処の地域よりも早く、将来の村を担い発展させる子弟の為に、教育の力を通して基礎知識を養い育てた心意気が、各時代を通してひしひしと伺えます。時代に依り思わぬ事件もあったが、こうした村民性が江戸時代よりどの地域より力強かったのは、東山口の伝統であり底力であって誇りとするものです。その心を今後も大いに大切に育てて行きたいものです。

生涯学習活動が始まりました

昭和 52 年榛村新市長の誕生と共に、全国に先駆けて「生涯学習都市宣言」を提案して、生涯に渡って老若男女を問わず、ゆっくりゆったりスローライフと報徳文化の精神を以って、生涯学習の都市づくりを推進して来ました。

更に「年輪の集い」を設け、それぞれの人生の節目に振り返り、新しい決意を立て生涯学習の町に相応しい生き方を模索する事にしました。

その実践のために各地域には「地区学習センター」を設け、地域ごとに新興計画を立て邁進する事にしました。そして総元締めとして「掛川市総合学習センター」を建造し活動の中心に相応しい殿堂が完成しました。

東山口はそれ以前の昭和 48 年から、新任の婦人会長は小中学校の児童生徒の低体力低体位の改善の為に、時の区長会長に請願して旧東山口村役場に 6 台の調理台と必要な器具を備え、農林省磐田農業改良事務所の小長井普及員に依頼して、「食生活改善講習会」を立ち上げ、各地域部落ごとに本格的講習会を開き実践に入りました。漸く始まった小学校の学校給食と相まって、戦後の粗末な食生活は急速に改善されました。

前述の様に掛川新市長は昭和 54 年より、各地域ごとに「地区学習センター」を設けて、生涯学習本来の活動の推進をする拠点を造る事を決めました。当時市議会議長を務めていた草賀氏は、原田地区に最初の理想に叶った地区センターを建て、活動の火ぶたを切ろうと張り切り、各戸より 2 万円の拠出をして頂きました。市は地区センターの建物は市費と補助金で賄う事にしましたので、各戸 1 万円は返却し残りの 1 万円で設備を整え、特に調理室は鍋釜食器類全てを整え、婦人会の皆さんに「さあどうぞお使い下さい。」と素晴らしい援助をして理想的な地区の拠点が出来た。

地区センターの建設には 2 種類あって、①文部省の補助金を受けるには必ずシャワー室の設置が義務付けられていた。②農林省の補助金はシャワー室は不要である。その分だけ調理室が広く使える構想で、大型洗濯機(蒲団丸洗い可)大型蒸気釜、味噌作り等の機械が補助金

で買える。2 方法があった。

磐田農林事務所も普及員を通じて、掛川市内で最も先進的で食生活改善に取り組んでいる東山口に、是非農林省型の地区センターの建設をと内診があった。しかし之を区長会に最初に声を掛けなかったと、或る区長が会長に働き掛け猛反対を始めた。本来区長会が先頭に立って生涯学習運動の推進を図り、どの形式が地区の理想に叶うか研究すべきだが誠に理不尽な結果となり、最終的に第二候補地の曾我地区に移すと云う最終回に漸く印鑑を押したと云うお粗末な結果となった。

従って東山口は昭和 57 年度に農林省型の地区センターとなった。区長会は、調理室には補助金で購入できる機器のみしか与えず、日常使用する農産加工、調理用具の鍋・釜・茶碗・箸に至るまで、全て婦人会員が市のイベントで出店した味噌・コンニャク・甘酒等の利益金を自腹で買い揃えると云う、市内最悪の条件で「農村婦人の家」(地区センター)の運営が始まった。

婦人会の農産加工グループ(ゆとりすと)は、土地を借りて野菜作りを始め、更に自家の野菜も東山口農協支所に頼み「良心市」を設けて販売をも始めた。昭和 58 年度 5 月～8 月間の調理室の活動状況を見ると、338 回使用、3330 人でトマト・ケチャップ・竹の子・ワラビの瓶詰・茄子辛子漬・味噌・醤油・甘酒作り等の農産加工、並びに葛布作りと云う盛況振りが市広報、新聞社の取材を受ける程の盛んであった事がわかる。

しかし地区センターの運営は、前年度の区長で退職した者が名目的に館長になったが、生涯学習推進の課題を受け留める事は殆んど無く、イベントの挨拶に立つ程度で、推進の中心は全て女子の事務長(主事)が各部の計画・推進等の助言やアドバイスをして、生涯学習宣言都市宣言にふさわしい活動を始めたが、活動の中心は婦人会であった。従って東山口の地区センターが生涯学習都市として本来の活動が始まったのは、暫く後の「東山口っていいね」をキャッチフレーズにした榛葉新館長時代からと云えよう。